



## 馬耳東風

「国土面積の0.6%にすぎない沖縄県に、米軍専用施設の約74%が集中している」ことは、翁長沖縄県知事がことあるごとに訴えているので、本土在住の間でも多くが知っている。しかし「他人の痛みは何時間でもガマンできる」の言葉ではないが、私も含め多くの人が深く考えようとしていないのではなかろうか。その大きな理由は、何を言っても無駄だという「あきらめ」であろう。かつて民主党政権時代、鳩山由紀夫首相が「普天間基地は最低でも県外移転」と言って沖縄の米軍基地負担を軽減しようとしたが、果たせなかった。このときわれわれは、米国の壁の厚さを思い知らされ、日本は米国の属国のようなものなのだと認識させられたのである。

しかし、われわれの思いとは別次元の深い思いを抱いて、沖縄と沖縄の人たちに心を寄せ続けられている方がいる。天皇陛下である。陛下は皇太子時代の1975年7月、鎮魂のため南部戦跡を訪ねたが、宮内庁関係者らは過激派活動家らの抗議行動を恐れて戦跡立ち寄りに反対したという。しかし皇太子は、「何が起きても、私はそれを受けます」と言って「ひめゆりの塔」を訪れたのである。危惧されたとおり、皇太子ご夫妻の近くに火炎瓶が投げつけられたが、ひるむことなく次に予定していた「摩文仁の丘」の複数の慰霊塔を回られた。以後慰霊の旅を重ねられ、今年3月のご訪問が11回目だったという。

沖縄に限らず陛下は先の大戦で多くの日本人が戦死した地を誠に精力的に訪れ、慰霊されておられる。パラオ共和国のペリリュー島へ戦没者慰霊に訪問された時には、島の名前すら知らなかった私は大変驚いた。さらに日米両国の戦場となり、100万人以上の現地の人たちが

犠牲になったフィリピンでは、「無名戦士の墓」の碑に向かって2分近く頭を下げられた。この半年前、日本を訪れたアキノ大統領に対し、「先の大戦においては、日米間の熾烈な戦闘が貴国内で行われ、多くの貴国民の命が失われたことは、私ども日本人が深い痛恨の心と共に、長く忘れてはならないこと」と述べられたという。

陛下はまた災害地の被災者をたびたび慰問されている。雲仙普賢岳、阪神大震災、東日本大震災、熊本地震は言うに及ばず、小規模の災害被災地にも駆けつけ、両陛下が床に膝をつかれて被災者をねぎらっている様子が臉に焼き付いている。

このような陛下のご行動はどこから来ているのだろうか。先の大戦時、昭和天皇は、海軍の出光武官に対して、「軍部が、(天皇機関説を支持する)自分の意に随わずして、天皇主権説を唱えているのは矛盾ではないか？」と軍部の姿勢に強い疑問を投げかけている(出典：天皇機関説事件、山崎雅弘、集英社新書)。ちょっとわかりにくいですが、「自分は絶対君主ではなく、国を統治する機関の長であり、その権限は大日本帝国憲法の範囲内で行使するものとする天皇機関説を支持している。天皇主権説をいうなら、この私の考えに背くべきではなかろう。」という指摘なのである。このように聡明な昭和天皇が、敗戦後、新憲法の「象徴天皇」のあるべき姿について深くお考えになり、また折にふれて今上天皇とお話になられたことは想像に難くない。それを受けて今上陛下は、一生の命題として「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」としてのあるべき姿を考え続けられておられるのであろう。それにしても天皇皇后両陛下は激務である。宮内庁のウェブページをみればその過酷さに誰しも驚くに違いない。退位後はごゆっくりとご静養いただきたいと心底強く願っている。(久)